

『長男溺愛シンドローム』

著: 藍生 有

ill: 桜井りょう

三希が無言で風呂に入ってくる。温かいシャワーを浴びてから、タオルにボディソープをつけて洗い始めた。

自分と顔立ちは似ている三希だが、体つきは全く違った。適度な筋肉がついた三希の体は、既に大人と評するのがふさわしくなっていた。

生徒会の仕事が忙しいからと剣道部は辞めたはずだけど、どこかで運動をしているのだろうか。

「じろじろ見るなよ」

三希が低い声で言った。

「ご、ごめん。……お前がその、大人になっててびっくりして、つい」

悪かったと素直に謝り、視線を外した。

三希は黙々と体を洗う。彼が体についた泡をシャワーで流す。水音が浴室に響いた。

彼がバスタブに入っている間に、髪を洗って出て行こう。やっぱりなんだか、どうにも気まずいから。

肩まで湯に浸かり、出るタイミングを見計らう。

「昨日のこと、聞いてたんだって」

三希はシャワーの音に負けない声を上げた。

「……あ、うん。二葉だな」

全く口が軽い、とため息をつく。翌日には本人の耳に入っているというのはどういうことだ。

「別にそれはいい。あんなことはよくあるから」

シャワーをフックに戻した三希がこちらを見た。

「よくある？ すごいな。……羨ましいよ。顔は似てるのに、なんでお前はそんなにもてるんだらうな」

苦笑しつつ、三希と入れ替わろうとバスタブから出ようとした時、だった。

「どうでもいい、そんなこと」

三希は濡れた髪をかき上げ、紀一を真(ま)っ直(す)ぐに見据えた。

「聞いてたんだろ。俺、好きな人がいる。子供の頃からずっとだ」

「そう、か。うまくいくといいな」

子供の頃ということは、紀一が知っている相手だろうか。だがすぐには思いつかなかった。

「本当にそう思うか。——相手が男でも？」

低い声が浴室内に響く。

「え……」

意味がすぐに分からず、何度か頭の中で反(はん)芻(すう)する。

相手が、男。そんな答えがくる可能性を、全く考えていなかった。

「まあそれは、その……」

いいんじゃないか、と小さな声で答える。デリケートな問題だから、なんと答えるのが正解なのか分からない。ただ否定するのだけは違うと思った。

三希は無言で紀一を見つめている。

空気が重たい。このままバスタブに沈んでしまいたくなる気持ちを堪え、無難な答えを口にした。

「お前が好きな相手なら、俺は応援するよ」

それで会話を終わらせようとした。しかし三希は食い下がってくる。

「血が繋(つな)がっていても？」

「……え？」

三希の腕が、紀一の腕を掴んだ。逃がさないともいうかのように強く握られ、目を見張る。

「好きだ」

囁かれた声は、蕩(とろ)けそうなほど甘い響きを伴っていた。

「……は？」

次々と繰り出される言葉が予想外すぎて、理解が追いつかない。

好きな相手は、男。血が繋がっている。今、好きだと言われた。

——三希が好きな相手は、もしかして……。

弾かれたように顔を上げる。

自分とよく似た顔が、吐(と)息(いき)が触れる距離まで迫っていた。三希が何を言っているのか、聞き返そうと思うのに、うまく唇が開かない。

「もう我慢できない」

頬を包む三希の手。近づいてくる、怒っているように見える顔。

あまりに突(とつ)然(ぜん)すぎて、紀一は何が起きたのか分からなかった。

「おい、なっ……んっ……」

押しつけられた唇の柔らかさと熱さに目を見開く。すぐそばに、目を閉じた三希の顔がある。いつの間にか彼は、バスタブの中に入っていた。

キスをされていた。三希に。

初めての感覚に身震いする。なんでこんなことが起きているのか分からない。

唇をこじ開けようとする舌を反射的に拒む。体を硬く強(こわ)張(ば)らせていると、背中に腕が回されてきつく抱きしめられた。

濡れた体がぴったりと密着する。筋肉の硬い感触を押し返そうとしても、もがくだけで終わってしまった。

「んっ」

唇を押しつけられる。下腹部に当たっているこの硬い感触は、もしかして……。

三希の興奮を感じ取り、冷や汗が滲んだ。バスタブの中で滑(すべ)りそうになりながら、必死で唇をもぎ離す。

「っ、は、あ……」

息を吸う。何も言わない三希の目が唇に向けられていた。眼(まな)差(ざ)しに含まれる欲情の色が、全身を震わせる。

なんで、こんな情欲のこもった目で見るんだ。自分たちは、血の繋がった兄弟なのに。

三希の手が、紀一の後頭部に置かれた。再び顔が近づいてくる。逃(のが)れようと顔を逸らした時、バスルームのドアが勢いよく開いた。

「何してんの」

顔を出したのは二葉だった。

「た、助けてくれっ」

三希に抱きすくめられた状態で、自由になるのは指先と口だけ。でも二葉なら助け
てくれる。

「これ、どういうこと？」

二葉が問いかけた先は、紀一ではなく三希だった。

「兄ちゃんが誘った」

三希の口から出た言葉が信じられず、その場に凍りつく。

「……兄ちゃんが？」

本当に？ と二葉に問いかけられる。

「俺はただ、一緒に風呂に入れと言っただけだ。三希、冗談にしても程があるぞ」

必死で三希の腕から抜け出そうとするけれど、彼の力は緩まなかった。

「冗談？ 俺がそんな気持ちで、こんなことをすると思っているのか」

三希は露骨に不(ふ)機(き)嫌(げん)そうな顔になった。わずかに力が緩んだその隙
(すき)に、彼の腕を振り払う。

「いいからとにかく落ち着け」

この場から一刻も早く逃げ出したいくて、バスタブから出て二葉の横をすり抜けようとし
た。

「俺は落ち着いている」

だが右腕を三希に引っ張られ、後ろから抱きとめられてしまう。

「異常だってことも、ちゃんと分かってる。俺だって悩んだ。でも駄(だ)目(め)なんだ。兄
ちゃんじゃないと、俺は……」

苦しそうな声で告げられる、三希の想い。なんと返せばいいのだろう。どうやったら、
彼を傷つけずにその気持ちを断れるのか。

きっと彼は、兄への愛情を恋愛と勘(かん)違(ちが)いしているだけだ。早く訂(てい)正
(せい)しなくては、そう思うのに、言葉が胸の中で詰(つ)まってしまっって何も言えない。

「だからってさ、いきなり風呂でって、がっつきすぎだと思うよ」

バスルームのドアにもたれていた二葉が、呑(のん)気(き)な声で言った。

「ベッドまで待てないなんて、三希も案外お子さまだね」

「うるさい。仕方ないだろ、チャンスだと思ったんだ。ここがいやなら、二葉が出て行け
よ」

三希の口から、聞いたこともないような低い声が出ている。生まれた時から知っている
弟とは、まるで別人のようだ。

「出て行かないよ」

二葉はそこで、スーツが濡れるのも構わず、バスルームに入ってくる。

「……僕も兄ちゃんが大好きだよ。仲間はずれはいやだな」

二葉が発した言葉が信じられず、彼の顔を見つめた。いつもと変わらない、明るい
笑顔。だけどその目にだけ、知らない色が滲んでいる。三希と同じ、情欲に濡れてい
た。

「お前、今、なんて……」

「だから、僕も混ぜてって言ってんの。二人だけなんてずるい」

いいでしょ、と彼はその場でスーツを脱いでいく。
「二葉まで、……どういことなんだ……」
何が、どうして、こうなった。疑問ばかりが頭に浮かぶ。
仕事から帰ってきて、風呂に入っていた。そこへ雨に濡れた三希が帰ってきた。一緒に入ればいいと声をかけたのは紀一だ。——それが、どうしてこんなことに。
「僕たちは兄ちゃんが好きなんだよ」
手早く裸になった二葉が、バスルームに入ってくる。ドアの閉まるばたんという音が、こんなにも残(ざん)酷(こく)な響きに聞こえたのは初めてのことだった。

本文 p50～57 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>